

# エミレイ・ディキンソン研究

## — 詩 へ の 道 —

樋口日出雄

### I

歴史に名高い南北戦争を十年後に控えた1850年頃には、アメリカ合衆国は大資産を貯えており、ラム酒の売買、奴隷の売買、それに紡績産業とかいうものが日ごとに増大する傾向をみせていた。北部のニューイングランド諸州は膨大な貴重品をかかえた博物館のようであったといわれる。そのニューイングランドの由緒ある町アマースト (Amherst) に生まれて、そこに育ったエミレイ・ディキンソンは、1850年には丁度20歳の娘盛りであった。すでにアマースト・アカデミイを終え、当時としては珍しい女子寄宿学校 Mount Holyoke Female Seminary における教育も中途退学の形式ではあったが、彼女の教養に確乎として、空疎ではありえない意義付けを加えていたに違いない。

当時ピューリタニズムは、ニューイングランド住民の人生観の基調であって、ディキンソン家も、上記の学校もこの基調に反する意図は示していない。だが都市部での迅速な工業化は、この時すでに胎動を始めていた。エミレイが手紙の中で、自分の悪夢として語った次のエピソードは、ニューイングランドの生活の二重性格を示唆しているように思われる。(註1)

1850年1月のことである。エミレイは、かつての学友 Abiah Root 宛に手紙を送って近況を知らせたが、その際にいささか常軌を逸した突飛な悪遊びを書きつけてた跡がある。アルプス地方からニューイングランドを訪れた、一種の悪霊が彼女の遊びの相手なのである。この悪霊は、一見したところ通商使節なら相応しいような風変りな身仕度 (a huge pocket handkerchief and a very red nose) で彼女の前に現われる。彼女は風

変りな点について、こう説明する――

The first seems so very abundant, it gives you the idea of independence and prosperity in business. The last brings up the "jovial bowl, my boys," and such an association's worth the having.

彼女の夢も、多くの夢想のように時間的、空間的な生活の様式の拡張であるが、特徴的であるのは夢に現われたのは決して自分の周辺にいるニューイングランド人ではなくて、ヨーロッパのアルプス地方人であるという点にある。そして商売の繁盛を目指し、独立自尊の生きかたをモットーに、陽気に酒もたしなむ異形の人物が、ニューイングランド人を自負する彼女に生活様式の上で変化をもたらす張本人として意識されたという事実は、のちにも触れることになろうが注目すべきことなのである。

繊細鋭利な詩眼を認められながら、久しくその全貌を明らかにされなかったエミリーの詩稿は、幾度か不完全な詩集が世に出た末に、ようやく1955年まとめられて、極めて良心的な T. H. Johnson の編集による全集として世に問われた。本論では、この全集を中心のテキストとして、最近に出版された Robert N. Linscott 編の *Selected Poems and Letters of Emily Dickinson* (1959) によって、主として彼女の書簡に当たることにした。(註2)

## II

ジョンソン版全集によると、エミリーの詩の第一作が書き始められた時期を、彼女のヴァレンタイン詩という形式の習作詩の発表の時期と同一視している。この習作時代に、隣り町の新聞、「スプリングフィールド・リパブリカン」に作者の名を伏せてお目見えしたのが、これから本論で引用し解釈するヴァレンタイン詩である。同新聞が作者に全然関心を払っていないのかというと、さにあらず、この詩の作者は一流の書き手ではある

が、ヴァレンタインを贈られたからといっても当新聞としては、この作者と何らかの関係を結ぶ用意はない——と巧まざるユーモアをもって、この無名の作者の紹介をしているのである。(註3)

同紙上に発表された “A Valentine” と題する一篇を、次に引用し、解釈を加えることにする。

“Sic transit gloria mundi,”

“How doth the busy bee,”

“Dum vivimus vivamus,”

I stay mine enemy!

Oh “veni, vidi, vici!”

Oh caput cap-a-pie!

And oh “memento mori”

When I am *far* from thee!

Hurrah for Peter Parley!

Hurrah for Daniel Boon!

Three cheers, sir, for the gentleman

Who first observed the moon!

Peter, put up the sunshine;

Pattie, arrange the stars;

Tell Luna, *tea* is waiting,

And call your brother Mars!

Put down the apple, Adam,

And come away with me,

So shalt thou have a *pippin*

From off my father's tree!

---

I climb the "Hill of Science,"  
I "view the landscape o'er,"  
Such transcendental prospect,  
I ne'er beheld before!

Unto the Legislature  
My country bids me go;  
I'll take my *india rubbers*,  
In case the *wind* should blow!

During my education,  
It was announced to me  
That *gravitation, stumbling*,  
Fell from an *apple* tree!

The earth upon an axis  
Was once supposed to turn,  
By way of a *gymnastic*  
In honor of the sun!

It *was* the brave Columbus,  
A sailing o'er the tide,  
Who notified the nations  
Of where I would reside!

Mortality is fatal -  
Gentility is fine,  
Rascality, heroic,  
*Insolvency, sublime!*

Our Fathers being weary,  
Laid down on Bunker Hill;  
And tho' full many a morning,  
Yet they are sleeping still,-

The trumpet, sir, shall wake them,  
In dreams I see them rise,  
Each with a solemn musket  
A marching to the skies!

A coward will remain, Sir,  
Until the fight is done;  
But an *immortal hero*  
Will take his hat, and run!

Good bye, Sir, I am going;  
My country calleth me;  
Allow me, Sir, at parting,  
To wipe my weeping e'e.

In token of our friendship  
Accept this "Bonnie Doon,"  
And when the hand that plucked it  
Hath passed beyond the moon,

The memory of my ashes  
Will consolation be;  
Then, farewell, Tuscarora,  
And farewell, Sir, to thee!

### Ⅲ

エミレイは絶えず伏線を張る。恰も彼女の恋愛は、これらの「伏線」によって、次々に仇討ちを被るかのようである。この詩にある “My country” とは、昔からの格式をもつピューリタニズムの陣営に他ならず、さらにこの詩人の故郷に即していうならば、ピューリタニズムを基本理念とするアマースト大学の創設者の任を務めた家系に属した、という事実は、この詩人の精神の奥に、いい知れない底力として生き続けたに違いない。そして、こういう場にいる詩人が導いていかれる先にある「伏線」とは、詩人自身のいかに必死の論陣にも拘われず、さらにまた、あのアルプス地方人による側面からのニューイングランド攻略にも拘わらず、祖先からの神聖な “My country” の完成という事業は歩みを止めないという予見でもある。

たとえば詩の中頃に顔を出すところの「負債」(insolvency) という一句は、「科学の丘」で教えられる、途方もない、あらゆる常識を超越した科学知識のもたらした、現実社会の財産の浪費を暗示し、表面的には当時の新知識と、これを新産業に利用する一部のニューイングランド人に対する皮肉である。しかし同時にまた、詩人の「伏線」を仙って、一步足を進めてみると、この “insolvency” という一句を “sublime” と定義するという詩人の側の態度が、またおのずから反省されてくる。「負債」という同じ文句が、愛という元金を神聖な相手——それが国土であれ、また愛人であれ——を前にして、「負債」に至るまで使い尽くすこと、その元金の効用の限界までつき進むこと、これらの事もまた意味するのである。“Insolvency [is] sublime” とは、そのような「伏線」を秘めたパラドキシカルな文句である。

いま少しパラドキシカルな伏線を追うと、

I climb the “Hill of Science,”

I "view the landscape o'er;"  
Such transcendental prospect,  
I ne'er beheld before!

四行のうち三行までが“I”を先頭に立てて始まるこの一連は、賛美歌の文句を借用した点からも推察されるように、彼女の内心の悩みと、「科学」で代表される社会の側の変動との起縁が語られている。エミリーは、「科学」の支配する外界と自分の内心とが、これといった反目を示さないように、愛人との関係が、やたらに“transcendental”な漠たる関係にあって、真にうちとけた告白に進展しないのを「伏線」の裡に隠れて暗示しているのかもしれない。だが“transcendental”という事項に関しては、特に註釈が必要である。

〔特 註〕

当時“transcendental”といえば Emersonianism を指すものであったことは、たとえば *The American Peoples Encyclopedia* の Emerson の項に明白である。エミリーは B. F. Newton という名の青年からエマソンの“transcendental”な思想を教えられたし、1853年2月ニュートンの死の前月に兄のオースチン (Austin) に“I admire the “poems” very much.”と打明けたときの“Poems”とは1849年にニュートンから贈られたエマソンの新刊詩集であった。

デイキンソン家とエマソンとの関係を調べてみると意外に深い結び付きを見出すことができる。1857年エマソンがアマーストに講演に立寄ったときには、兄オースチンの家庭を訪れている。この時エミリーがどのような態度を示したかは不明であるが、後年1878年 *A Masque of Poets* という無名詩人のアンソロジーを企画した出版社が、Thoreau, Lanier などと並べて Dickinson を詩壇に紹介する労をとったとき、エミリーに有名な後援者がいないという理由で、著作の責任を負ってくれたのはエマソンであった。

もとに戻っていうならば、エミリーの詩の誕生において、詩への道を拓

くのは、ニューイングランド人に共通な予見であり、時としては、パラド  
キジカルな「伏線」に物をいわせるあの“Emersonianism”またの名、  
“Transcendentalism”であった。

#### IV

禁断の実は、その香りで  
正常な果樹を圧倒する。  
法により封じられた、さやの内に  
豆の実が水々しく並ぶ。

Forbidden Fruit a flavor has  
That lawful Orchards mocks —  
How luscious lies within the Pod  
The Pea that Duty locks —

(註4)

このように円熟した四行詩を味わうためには、読者はエミリーの青春期  
以後まで待たなければならないが、この「バレンタイン」に見える次の四  
行は円熟以前のエミリーの感情の原型を伝えているといえるであろう。イ  
メージは、青春の香りを含む若々しい果実という自然のイメージを中心と  
している。

Put down the apple, Adam,  
And come away with me,  
So that thou have a *pippin*  
From off my father's tree!

若々しい青春のエネルギーと同時に、しかし、詩人の見据えている一方  
の端は、あのニューイングランド社会の二重性格に結ばれている。先にも



述べた如く、自然の中で陽気に存分に青春を歌う、エネルギーで、幾分コケティッシュな一方の性格と、これに乖離する要素を秘めた他方の、実業に勤勉に励むことを第一として極端に重視する性格——これらの両方の性格は、このバレンタインの詩の構想以前に夢の形をとってエミレイの意識に訴えかけていたのである。植物学上は同じリンゴという種類であれ、“the apple”と“a pippin”とを問題にするエミレイの差別意識は、決して無視してはなるまい。それはそのまま、ニューイングランドという地域社会に生きる詩人の二重意識に、あの「伏線」につながるからである。

エミレイにとって、青春の愛の歌とは、この二重意識を通過せずには白々しい告白と感じられていたに違いない。エネルギーだが、幾分極端なところのあるニューイングランド社会を象徴する、禁断の実「リンゴ」よりも、自家製の「小リンゴ」(pippin)を味わえと勧めるエミレイの文句の行間には、法律家志望の青年に対する詩人の愛らしい眼差が感じられる。だが、あえていうならば、これでは愛の直截な表現となるには不足であろう。なぜなら、一生自家を離れず、他家へ嫁ぐことのなかった詩人に即していえば、「自家製」の愛らしい「小リンゴ」は、「家」という小宇宙に住みついて、いつまた封じられた「さや」の内の「豆」となりおおせるかも判らないからである。

## V

エミレイと交友のあった数少ない文壇人のひとり、T. H. Higginson は、1870年8月、デイキンソン家を訪れた際に、飾り気なく、(ingenuous) 淡白 (simple) でありながら、transcendentalist の Mr. Alcott のようなマナーを交じて語ったエミレイの談話の幾つかを、自分の妻に手紙で報告したのであるが、そのうちから、二、三の例を引用してみると……………

(註5)

“Truth is such a rare thing,  
it is delightdul to tell it.”

「真実は、非常に珍しいものです、  
真実を語るのは楽しいものです。」

“Women talk ; men are silent.

That is why I dread women.”

「女はしべやり、男は沈黙します。  
ですから女は恐ろしいのです。」

これらの言葉をひくまでもなく、彼女は言葉を節約する方法を知っていた。これは、とりも直さず、ニューイングランドという歴史的社會にあって、「過去」への追憶が、やたらに感傷に流れていないという事である。この詩を見渡してみると、過去形で叙述される中央の僅か三連を除いて、エミリイは現在形で語る。ニューイングランドの「過去」も **Bunker Hill** の英霊も、エミリイの「真実」の前では、虚飾を捨てた、列を組んだ兵士に過ぎない。彼女の「詩」とは、もはや、「過去」の心象風景を写すものではなく、この飴のように伸びる「過去」を引きずった、「現在」を、いかにうまく切りつめるか、という經濟上の問題である。ここに彼女の「真実」の実相がある。お望みであれば、「愛」の「真実」といい直してもよい。

In token of our friendship

Accept this “Bonnie Doon,”

Aud when the hand that plucked it

Hath passed beyond the moon,

The memory of my ashes

Will consolation be ;

Then, farewell, Tuscarora,  
And farewell, Sir, to thee!

切りつめた、飾り気ない文句の行間には、いかにもエミリーらしい、過去形の“memory”を、現在形の“consolation”に化す「詩」への道がある。それは、そのまま、各スタンザに共存するエミリーの自己表現の姿勢と重なる。それは、そのまま、「真実」を語るに「伏線」を張らざるを得ない彼女の姿勢と重なる。

#### Notes

- [ 1 ] Robert N. Linscott (ed.),  
*Selected Letters* : New York, PP. 231—2.
- [ 2 ] Thomas H. Johnson (ed),  
*The Poems of Emily Dickinson* :  
3 vols., Cambridge, Mass., 1955.  
Robert N. Linscott (ed),  
*Selected Poems and Letters of*  
*Emily Dickinson* : New York, 1959.
- [ 3 ] Johnson, *op. cit.*, vol. I, PP. 5—6.
- [ 4 ] Johnson, *op. cit.*, vol. III, P. 949.
- [ 5 ] Higginson to his wife :  
Amherst, Aug. 16, 1870, 10 P. M.